

博士論文（要約）

論文題目 財政支援からみた近代中国の新疆統治

氏名 上出 徳太郎

目次

序章 新疆財政史研究の意義と課題.....	7
1 新疆という地域と中国統治の歴史	7
2 問題設定	15
3 先行研究	19
4 課題と方法.....	23
5 本論文の構成	28
第1章 新疆統治の始まりと変容——財政支援に着目して	30
はじめに.....	30
第1節 清朝財政と新疆への財政支援制度	30
1 経費の見積もり時期.....	34
2 送金指示の時期と期限の設定	36
3 輸送と立て替え払い.....	38
4 奏銷制度.....	40
第2節 協餉の金額についての分析	42
1 総額について.....	42
2 地域別の協餉の金額について	47
3 送金の実態と清朝財政内での位置づけ	53
第3節 新疆への協餉に関わる制度と問題	61
1 内地からの物資の輸送	61
2 備蓄制度	64
3 銀の行方	68
小結	71
第2章 清末西北動乱の鎮圧過程における協餉	73
はじめに.....	73
第1節 左宗棠登場以前の西北部への協餉.....	75
1 動乱以前.....	75
2 動乱初期.....	77
3 沿海部の資金の導入 同治3年（1864）以降	79
第2節 左宗棠の登場.....	81

1 同治5年(1866)の陝西、甘肅	81
2 同治5年(1866)の新疆	84
3 左宗棠の西北到着 同治7年(1868)以降	86
第3節 新疆遠征のための協餉	88
1 本格的遠征以前	88
2 遠征準備	90
3 新疆遠征	91
小結	93
第3章 新疆建省前後における協餉の変遷——甘肅新餉に注目して	95
はじめに	95
第1節 動乱直後の状況と左宗棠の建省論	96
第2節 新疆建省時点の協餉の実態と甘肅新餉	102
第3節 建省以後の協餉の変遷	107
小結	110
第4章 清末の新疆省財政と協餉	112
はじめに	112
第1節 新疆省への協餉	113
1 送金規定	113
2 送金の実態について	117
第2節 新疆省財政と協餉	124
1 通常の財政収支について	124
2 臨時支出への対応	129
小結	135
第5章 楊增新統治時期の新疆財政と中国内地からの財政支援	137
はじめに	137
第1節 楊增新時代の財政収支	138
第2節 楊增新の貨幣政策	144
1 革命の混乱と紙幣発行 1912～1914年頃	144
2 1915頃からの紙幣回収とその後の展開	146
第3節 内地と新疆の関係	151

1 直接的支援	152
2 間接的支援	154
小結	158
第6章 南京国民政府時期における新疆財政と貨幣政策	160
はじめに	160
第1節 混乱から回復へ 1928～1938年	161
第2節 新疆における幣制改革と日中戦争	165
第3節 新疆財政の崩壊	169
小結	172
終章 財政支援からみた新疆の近代	173
1 財政制度の変化——財政支援を中心に	173
2 財政支援と新疆統治の安定性	175
3 財政支援からみた新疆という地域	177
4 財政支援からみた新疆統治	179
5 新疆史における近代の意義	182
参考文献	186

本文

以下に、博士論文の要約を示す。

なお、本論文の一部は既発表論文を改稿したものである。

第2章——「清末西北動乱の鎮圧過程における協餉」『東洋学報』第98巻第2号、2016年、1-28頁

第3章——「新疆建省前後における協餉の変遷——甘肅新餉に注目して」『東方学』第135輯、2018年、74-89頁

序章 新疆財政史研究の意義と課題

18 世紀半ばにジュンガルを滅ぼし、カシュガル・ホージャ家の反乱を鎮圧した清朝は、中央アジアの東部、天山山脈の南北に広がる地域を勢力圏に収め、新疆と名付けた。その後 19 世紀末の国境画定により西北部がロシア領になった以外は、清朝時代の新疆の領域がほぼそのまま現在の新疆ウイグル自治区となっている。この約 250 年の間、中国の政権、すなわち清朝、中華民国、中華人民共和国はどのようにしてこの地域への影響力を保ち続けていたのか。特に政治的な混乱が続く一方で、経済開発や漢族の進出など、現代まで続く変化が生じた 19 世紀後半から 20 世紀半ばまでの時期は、新疆の歴史の中で重要な意味を持つ。本論文は、この時期を近代と呼び、この期間における中国による新疆統治を財政の観点から考察するものである。

新疆には辺境防衛のために 18 世紀末から常に大規模な軍隊が配置されていた。この軍隊を維持するために多くの財政支出が必要であったが、現地での税収は限られていた。この財政赤字を補うためには、中央政府や財政的に余裕のある省が資金を送ることが必要であった。新疆統治の安定性や新疆と中国内地の関係を考察するためには、この財政支援の分析が不可欠である。しかしながら個別の産業分野の発展や税制、貨幣に関する先行研究は存在するが、財政構造の全体像や財政支援の実態の解明は不十分である。そこで本論文では、乾隆年間から中華民国までの時期を対象として、中国内地から新疆に対して行われた財政支援に着目して新疆財政を考察した。

本論文では、各時期において、財政支援の制度、金額、地理的要素の三つの側面からの分析を行った。まず財政支援という制度は財政制度全体の中でどのような意義を持っていたのか。この問題について、主に貨幣制度と銀錠を備蓄する制度との関係から考察する。次に財政支援の金額について、送金されることになっていた規定額と実際に送金された金額の二つに分けて、できる限り定量的に明らかにする。財政支援の規定額は中央政府が定めた新疆統治構想の重要な要素の一つであり、実際に送られた金額は統治の安定性に直結する。また新疆が中国の西北部に位置しているという事実や、新疆への支援を命じられた地域の変化も、財政支援が持つ地理的要素として考察対象とする。地理的要素の分析から

は、新疆の中国内での位置づけと新疆内部の構造の考察が可能である。これらを踏まえて、新疆に対して行われた財政支援の全体像とその特徴を明らかにし、さらに財政支援が新疆統治に対して果たした役割について考察する。

第1章 新疆統治の始まりと変容——財政支援に着目して

この章では18世紀半ばに新疆統治をはじめた清朝が、当初作り上げた財政支援制度とその実態について分析する。清代には財政的に余裕のある省が、中央政府の指示を受けて、別の省へ資金を送る、協餉と呼ばれる制度があった。清代においては、この協餉を財政支援とみて、本章の主な考察対象とする。まず第1節では新疆に対して行われた協餉の制度面の特徴を論じた。協餉は通常、前年に必要な金額を見積もり、送金が指示されるものであるが、新疆への協餉においては二年前から見積もりが行われ、送金の指示も通常より早く出されていた。この措置は新疆まで銀錠を輸送するための時間を考慮したものであったと考えられる。それでも協餉の到着は遅れがちであり、甘肅省が立て替え払いを行うこともあった。財政収支の報告においても、都市間の連絡が困難な新疆に対しては、現地の責任者の権限を強めるという特別な配慮がなされていたが、この措置は不正行為を容易にするという問題もあった。

続く第2節では、この時期の新疆への協餉の金額についての考察を行った。金額については従来3つの説があったが、新疆への協餉と甘肅への協餉を区別することで矛盾なく解釈できることを示した。そして新疆東部の帰属が新疆と甘肅の間で曖昧であったことが実態を分かりにくくしてきたことを指摘した。新疆内の地域別の分析からは、道光年間の防衛強化により、新疆南部への送金額を増やす措置が採られたことを明らかにした。ただしこれは一時的な対応であった可能性もある。この時期における新疆への協餉は、主に新疆に近い内陸部の省が負担していたと考えられる。カシュガル・ホージャ家の勢力が新疆南部に侵入を繰り返した1820年代から1840年代には、新疆へ臨時の軍費が送られた。新疆への協餉は内地各省にある程度の負担をかけていたと思われるが、この時点では十分に実現していたことを明らかにした。

第3節では協餉と関連する2つの制度について論じた。一つは内地からの物

資輸送の制度である。仮に協餉が十分に届いたとしても、武器や茶など新疆では購入することが難しい物資があった。こうした物資は内地から新疆へ直接輸送されることもあった。もう一つの考察対象は銀錠の備蓄制度である。新疆各地と甘肅には銀錠が備蓄されており、軍事活動や協餉の到着が遅れた際に利用された。しかしながらこの制度は本来新疆東部で実施されていた制度であり、新疆全土で本格的に導入されたのは道光年間だと考えられる。

このように、新疆への協餉は、送金にかかる時間を克服する工夫がなされていた上、道光年間には軍費の一時的な増額や備蓄制度の整備も行われた。新疆統治制度は徐々に充実したものになっていったと言える。そしてこの時期には新疆への協餉は十分に実現しており、新疆統治の安定に寄与していたと考えられる。しかしながら新疆の社会や経済は依然として大規模な軍隊の需要を満たすほどには成熟しておらず、物資を直接輸送する必要があった。また各地の官僚の独立性が強いため、不正行為を行う余地が残されていた。そして新疆東路の財政的な位置づけがあいまいであったことから、この時期の新疆には財政的な一体性が欠けていたことが分かる。

第2章 清末西北動乱の鎮圧過程における協餉

本章では、1862年の西北動乱発生前後から1877年の新疆遠征の終了までを対象として、中国西北部（陝西、甘肅、新疆）での軍事活動を支えた財政支出について考察する。この動乱の鎮圧においては、主導的な役割を担った左宗棠の活動が重視されてきたが、ここでは動乱以前および左宗棠の登場より前の状況や、左宗棠以外の責任者の活動を含めて分析する。これにより左宗棠の活動の意義を再検討し、この時期の西北部への軍費の供給を財政支援の歴史の中に位置づける。

動乱以前から引き続き、新疆へは主に山西、河南、四川といった内陸の省が財政支援を行うことになっていた。しかし新疆へ送られる軍費は少なく、限られた軍費も陝西と甘肅で活動する軍隊が取り合っており、軍事活動は進まなかった。1865年には陝甘総督となった楊岳斌は、左宗棠よりも早く沿海部の資金を導入する計画を立てていた。1866年には外モンゴルにいた李雲麟が新疆への進軍を

命じられ、楊岳斌の後任として左宗棠が陝甘総督に任命された。しかし左宗棠は捻の鎮圧を優先し、西北部へ送られるべき資金を手元に留めていた。李雲麟により新疆の軍事活動のための送金はある程度まとめて設定されたものの、実際にはいくつかの部隊への送金経路が並列していた。

1868 年に捻が鎮圧され、沿海部の省からの資金が西北部へ送られるようになると、大規模な軍事活動が可能になった。左宗棠による資金調達の成功や彼が作った規定の持続性から見て、左宗棠が動乱鎮圧に果たした役割は大きかったと言える。一方で、送金の実現には中央の承認が必要であり、沿海部の資金の導入には、朝廷や前任者の計画も存在した。また左宗棠は管理する部隊や軍費の範囲を広げていったが、西征が進んでも彼の管理が及びにくい部隊も存在していた。それは特定の省から派遣された部隊（湘軍、張曜の部隊）や、動乱以前から陝甘総督とは異なる系統に属していた部隊（伊犁將軍の部隊）であった。新疆遠征の最終段階でも、左宗棠が管理する金額の半分に当たる軍費が、彼の管理下には置かれていなかった。

左宗棠は西北部の軍事活動の総責任者であったが、陝甘総督の立場で活動していたため、その影響力には限界があったといえる。西北部へ資金を送っていた省を分析すると、動乱以前から新疆建省以後に至るまで、主に山西、山東、河南、四川が西北部へ協餉を送るという体制が常に存在していたことがわかる。沿海部の資金は 1865 年以降に導入され、1868 年から動乱の平定までに使われた資金の多くを占めた。これは西北部への協餉の歴史の中では例外的な状況と位置づけられる。それでも新疆建省後にも江蘇省が継続的に送金していることから、動乱を経ることで西北部と沿海部の関係がやや強まったと言える。

第 3 章 新疆建省前後における協餉の変遷——甘肅新餉に注目して

この章では 1884 年の建省と呼ばれる政策を財政の観点から論じた。建省とは清朝による新疆省の設置とそれに伴う様々な改革を指す。この時に成立した甘肅新餉と名付けられた協餉は、建省を財政面で支えるものであり、以後省制時期の新疆への協餉はこの枠組みによって実施された。行政機構や軍制、少数民族政策などから見て、建省は中国の新疆統治史上の画期と言えるが、財政の

協餉依存など建省の前後には連続性もある。本章ではまず甘肅新餉に関する基本的なデータの収集を行う。そして、建省直後の時期において最大の課題であった軍縮との関係に注目して、協餉の金額や、内地の省への負担配分、新疆内での協餉の分配をめぐる議論や実態を分析する。

協餉の規定額に関する議論と実際に送られた金額の関係を探ると以下のようなになる。建省時点では、内地の負担を軽減するために軍縮と協餉額の削減を進める計画が掲げられていたが、その後は軍縮の進展にも関わらず、協餉の規定額は維持された。実際の送金額を見ても、清仏戦争の時期を除けば、送金状況は良好であったといえる。中央政府は、沿海防衛の必要性や新疆の経費削減の難しさ、内地各省の協餉負担能力など、その時点での条件を考慮して、常に新疆への協餉の確保に努めていた。

送金を送る側である内地の省や海関について分析すると、1885年から1888年までに、現地に近い省が負担するという協餉の基本理念に近い状態から、徐々に経済力がある沿海部にも負担が割り当てられるようになっていったことが分かる。西北部での軍事活動と建省を経て、新疆はより広い地域によって財政的に支えられるようになったのである。

送金経路を見た場合、動乱鎮圧後も各部隊への送金命令が乱立していた。そこで部隊の撤退や監査の強化などにより、資金の流れを一つにまとめる改革が行われた。従来この改革については、建省後も八旗の官僚である伊犁将軍に一定の権限が残されたことから、財政権限の一元化が不十分であったと説明されてきた。しかし軍縮や部隊の撤退により、多くの資金の流れが整理されたこと、送られた資金を新疆巡撫が分配する体制が確立したことから、改革は成果を収めたと言える。

第4章 清末の新疆省財政と協餉

この章は新疆省の体制が確立してから辛亥革命までの期間を対象とする。

まず第1節においては、協餉の総額と負担した内地の省や海関の変化を分析した。軍縮の進展とともに、支出することを認められた金額は徐々に減らされていったが、協餉の総額は維持されていたため、差額が甘肅や新疆の布政司庫に蓄

えられていった。1901年に義和団事件の賠償金の負担が新疆にも割り当てられたため、協餉は実質的に減少し、1904年には規定額そのものが減らされた。前章で明らかにしたように、建省直後には沿海部からの送金が導入されていたが、義和団事件以降は主にこの沿海部からの支援が減らされることになった。

実際に新疆に届いた協餉については、従来は義和団事件以降、協餉が送られなくなったとされてきた。しかし当時の報告書を調べることにより、到着する協餉の金額は確かに減っているものの、おおむね1900年頃の到着額が1906年頃まで維持されていることが明らかになった。沿海部からの送金が減る一方で、山西と四川をはじめとする内陸部が送金を続けていた。これらの省からの送金が途絶えることで、1907年以降の新疆財政は急速に悪化したのである。

第2節の前半では、新疆省内における協餉の受領と利用を中心とした新疆財政の構造を分析した。省制時期の新疆では、新疆巡撫（以下、巡撫）とともに、伊犁將軍（以下、將軍）と塔爾巴哈台參贊大臣（以下、參贊大臣）が、巡撫と同格の立場で協餉を受け取っていた。巡撫が協餉を受領し、それを將軍と大臣へ送るという構造があったことは知られている。本章では複数の収支報告書からこの構造の存在を確認するとともに、協餉の到着具合と財政状況がほぼ連動していることを確認した。そして協餉の不足に対応するため、巡撫が本来行政費を扱う布政司庫の資金で軍事費の不足を補ったり、將軍が巡撫や商人から資金を借りたりすることもあることを明らかにした。

第2節の後半では臨時支出への対応策を検討した。省制時期の前半には、主に協餉の規定額と支出額の差額を備蓄することで、ウルムチに毎年約20万両を蓄えていた。これがパミール高原での軍事活動や甘肅で生じた反乱への対応などに利用された。1899年頃までは新疆財政にはある程度の余裕があり、臨時支出にも対応できるものであったことが分かる。紙幣発行は1908年から大規模に行われるようになった。協餉が滞る清朝最末期において、巡撫と將軍の財政赤字をある程度補った。しかしカシュガルを除いては兌換準備が不足していたため、事実上の不換紙幣となり、軍隊や社会の不満を高めることになった。

第5章 楊增新統治時期の新疆財政と中国内地からの財政支援

本章では省長楊增新が新疆を統治した 1912 年から 1928 年までの期間を扱う。

まず第 1 節と第 2 節では、貨幣政策を含めた彼の統治時期の財政収支の全体像の解明を試みた。1912～1916 年の民国初期の予算に関する情報には疑問が残るが、政情の安定までには変動があったと推測できる。その後、1920 年代からは歳入の予算額は約 400 万元で安定することになった。しかしそれ以上の税収の増加は見られないため、楊增新による農業開発などの施策の効果は限定的であったといえる。歳出は体制の確立とともに一旦減少したが、1920 年頃から再び増加した。これは軍事費の増加によるものであり、1925 年からはさらに増えた。政治的には安定していた楊增新の統治時期であっても、内地の戦乱に対処する必要があったと考えられる。

常に赤字であったこの時期の新疆財政を補っていたのは紙幣発行である。1915 年までは不安定な政治情勢に応じて、紙幣の発行量が多かった。また、一時的にイリに成立していた革命政権が発行した紙幣を、ウルムチの省政府が発行した紙幣で交換することも行っており、貨幣面で新疆の統一が実現した一方で、省政府の紙幣発行額が増えることになった。この時期には商人が紙幣を銀に変えて内地に持ち帰ったこともあり、紙幣価値が下落し、軍人や警官が困窮した。

続く 1918 年までの時期には、政情の安定化に伴い、紙幣の回収が進められた。回収においては、アクスでは紙幣で納税させたり、カシュガルへの送金為替に高いプレミアムをつけるなど、各地の事情に合わせた様々な方法が用いられた。しかしながらこの時期にも新たな紙幣発行が続けられていた。1920 年代の紙幣発行については史料不足により不明な点が多いが、発行額が増加していったことは間違いない。ただし、紙幣流通量の増加と比較した場合、内地の通貨から見た新疆の紙幣の価値は、それほどまでには下落していないため、新疆の紙幣はある程度の信用を得ていたとも考えられる。

従来、辛亥革命以降は中国内地からの財政支援は行われなくなったと言われてきた。しかし、この時期にも新疆省政府は継続的に北京政府と連絡を取り合っており、財政支援の要請や予算案、収支報告書の提出も行われていた。第 3 節では、中国内地が新疆財政を支援したと考えられる事例について考察した。断片的な情報からではあるが、1919 年頃までは、年間数万元から 20 万元程度の財政支援が実際に行われていたと推測できる。また直接の送金とは異なる形で、中国の

内地が新疆を支援していたと考えられる事例もある。例えば新疆の官員が内地で活動する際の費用や旅費を内地の省が負担したり、小規模だが中央で内債を発行し、それを北京や天津の商人が購入していたことが挙げられる。また新疆で商人から資金を借りる際に、引き換える形で発行した紙幣は、中国内地の紙幣と交換可能であるという約束を伴うものであった。こうした例を見る限り、楊增新統治時期の新疆も財政的には決して内地から切り離されたわけではなかったといえる。

第6章 南京国民政府時期における新疆財政と貨幣政策

この章では 1928 年から 1949 年までの新疆の財政収支と貨幣政策について検討した。

1928 年から新疆の省長となった金樹仁の統治時期には財政赤字が増大し、紙幣発行額が増えていったとされている。しかしこの時期の紙幣価値は、紙幣発行額の増加から推測されるほどには下落していない。そして 1931 年以降に新疆で再び戦乱が拡大すると、軍事費の急増とともに、紙幣がさらに増発され、紙幣価値は流通量から推測されるよりも大きく下落していった。その後 1934 年に新疆省の政権を掌握した盛世才は、ソ連とのつながりを強め、国民政府からの影響力を弱めようとしたとされる。しかしながら、この時期には国民政府からの財政支援も再開しており、中国内地と新疆の関係が断たれたわけではない。また盛世才は借款などソ連から大規模な支援を得ており、ある程度安定して新疆を統治していたと言える。ただし、盛世才の統治時期にも、新疆で発行された紙幣の価値は下落し続けており、幣制の問題は存在していた。

中国内地では 1933 年の廢兩改元を経て、1935 年に幣制改革が行われたが、新疆での幣制改革は 1939 年まで遅れた。また内地の法幣との換算率を固定したとはいえ、新疆では独自の紙幣を発行し続けていた。その後 1944 年初めまでに一億数千万元の紙幣が発行されたが、法幣との交換率が変わることもなく、ある程度価値が安定していたと考えられる。財政面でも 1938～1941 年の財政収支は安定しており、紙幣発行額も財政規模から考えて不自然なものではない。

こうした財政と幣制における安定の背景の検討のためには、ソ連からの支援

の解明が必要である。ここでは日中戦争を背景とした内地からの送金の存在を指摘した。1938 年末に始まったソ連から物資を購入し、中国へ輸送する活動において、輸送費は新疆が一時的に立て替え、その後内地から新疆へ送金されることになった。これにより法幣が大量に内地から新疆へ流入することになったのである。しかしながら、大量に流入した法幣は新疆省発行の紙幣よりも価値が下がり、新疆経済を混乱させた。

その後 1943 年頃から歳出が増加し、新疆財政は紙幣発行に依存するようになっていった。1945 年にも内地から支援が行われたり、1948 年には国民政府が様々な改革案を出している。しかし 1948～1949 年には紙幣の発行額は月ごとに飛躍的に増大していった。さらに内地から法幣や金圓券が大量に流入したこともあり、新疆の幣制は混乱し、紙幣価値は急速に下落していった。1949 年に省政府は中国共産党の統治を受け入れることになるが、この時点では国民政府系の新疆統治はすでに財政的に破綻していたのである。

終章 財政支援からみた新疆の近代

結論として論文全体を踏まえて、財政支援制度とほかの制度との関係、財政支援の実現具合と新疆統治の安定性の関係、財政支援の地理的要素からみた新疆という地域の位置づけと構造の変化について整理し、分析を加える。

新疆の財政制度は、財政支援制度における不備を備蓄制度などを用いて補うものから、送金にかかる時間を短縮し、臨時の支出にも対応できるものへと改められていった。その画期はやはり内地と同じ統治制度を導入した建省である。しかし西征中の送金という前例の存在や、建省以後も備蓄制度はむしろ強化されていることから、制度上の変化は緩やかなものであったことが分かる。また、民国末期に内地との幣制上の一体化が逆に紙幣価値の下落をもたらすなど、変化には負の側面もあったと言える。

財政支援が届いている限り、中国の政権による新疆統治は安定しており、到着する金額が減少すると統治は動揺した。逆に、統治がある程度安定していた時期を調べると、金額が減少しながらも支援が届いていたたり、別の形で行われていたことが分かる。財政支援と新疆の軍事的安定は強く結びついていたといえるだ

ろう。財政支援により軍隊が維持され、外敵や現地民の反抗に対抗することができたが、同時に給与の遅配が兵士の政府への不満を高めることもあった。本来統治を支えるはずの大規模な軍隊の存在も、新疆においては危険が伴うものだったのである。

清仏戦争や義和団事件の影響はあったが、少なくとも清代においては、財政支援はかなりの程度実現していた。中国の西北部の辺疆に位置するという新疆の地理的特徴は、財政支援の実現に対してプラスに働いていたといえるだろう。新疆への協餉は多くの省が負担していたものの、内陸の省は常に送金を行っていた。これに対して沿海部の省や海関は、もとは主に軍事活動の時期に送金を行っていたが、新疆建省により常に新疆へ協餉を送ることになった。

新疆内部の財政的な構造を見ると、動乱以前の新疆への協餉は、都市別、地域別に設定されていた。そして新疆東部は甘粛との間で帰属があいまいであり、新疆の北部と南部も伊犁将軍のもとで集中的に管理されていたわけではなかった。この時点では財政的には新疆という枠組みが存在していなかったと言うこともできる。この構造は新疆遠征時にも続いており、遠征軍は一つのまとまりを持ってはいなかった。その後、建省により財政の一元的管理は達成されたのであり、新疆建省とは、財政的に新疆というまとまりを成立させた改革だったと解釈できる。

財政支援制度は中国における新疆統治の中でどのような意味を持っていたのか。清朝は民族的な多様性に富む地域を緩やかに統治していた。財政支援制度は、軍隊を維持し、時には地域間の経済格差を是正するなどの意味を持った制度であり、財政的に大清帝国を支えた制度である。さらに 19 世紀末の建省により、新疆の内部の差異や制度上の分断が解消され、新疆は財政的なまとまりを与えられるとともに、沿海部からの支援が恒常的に送られるようになった。近代に生じたこれらの変化により、新疆統治の安定性や中国内地とのつながりが強化されたと考えられる。

参考文献一覧

【史料略称】（ピンイン順）

『徳宗実録』：『大清徳宗景皇帝実録』
『方略』：『欽定平定陝甘新疆回匪方略』
『高宗実録』：『大清高宗純皇帝実録』
『革命檔案』：『清宮辛亥革命檔案匯編』
『金融檔』：『民国時期新疆金融檔案史料』
『聯奏稿』：『聯魁新疆奏稿』
『劉奏稿』：『劉襄錦公奏稿』
『馬広奏稿』：『伊犁將軍馬広奏稿』
『民国新疆檔案』：『民国時期新疆檔案匯編 1912-1927』
『民国新疆檔案』 2：『民国時期新疆檔案匯編 1928-1949』
『饒稿本』：『新疆巡撫饒応祺稿本文献集成』
『陝西司』：『戸部陝西司奏稿』
『陝西司（丙戌）』：『戸部陝西司丙戌年奏稿』
『陝西司（丁亥）』：『戸部陝西司丁亥年奏稿』
『陶奏稿』：『陶勤肅公奏議遺稿』
『東華統録』：『同治東華統録』
『文宗実録』：『大清文宗顯皇帝実録』
『宣統政紀』：『大清宣統政紀実録』
『宣宗実録』：『大清宣宗成皇帝実録』
『硃批奏摺』：『光緒朝硃批奏摺』
『左全集』：『左文襄公全集』

【未公刊史料】

国立故宮博物院図書文献館（台北）清代宮中檔奏摺、軍機處檔摺件

【公刊史料】（漢籍は書名のピンイン順）

楊增新撰『補過齋文牘』（楊建新主編『西北史地文献卷』蘭州：甘肅文化出版

社、1999 年、『補過齋文牘統編』、『補過齋文牘三編』を含む)

『大清德宗景皇帝実録』(『大清德宗景(光緒) 皇帝実録』台北：華文書局、1964 年)

『大清高宗純皇帝実録』(『大清高宗純(乾隆) 皇帝実録』台北：華文書局、1964 年)

『大清文宗顯皇帝実録』(『大清文宗顯(咸豐) 皇帝実録』台北：華文書局、1964 年)

『大清宣宗成皇帝実録』(『大清宣宗成(道光) 皇帝実録』台北：華文書局、1964 年)

『大清宣統政紀実録』(台北：華文書局、1964 年)

王雲五主持『道咸同光四朝奏議』台北：台灣商務印書館、1970 年

『甘肅省財政説明書』北京：經濟学会、1915 年

劉郁芬修、楊思等纂『甘肅通志稿』(中国西北文献叢書編輯委員会編『西北稀見方誌文献』第 27-29 卷、蘭州：蘭州古籍書店、1990 年)

朱寿朋編『光緒朝東華錄』1909 年(張静盧等校点『光緒朝東華錄』北京：中華書局、1958 年)

中国第一歴史檔案館編『光緒朝硃批奏摺』北京：中華書局、1995-1996 年

劉嶽雲撰『光緒會計表』1901 年

中国第一歴史檔案館編『光緒宣統兩朝上諭檔』桂林：廣西師範大学出版社、1996 年

鐘方纂『哈密志』1846 年(中国地方志集成、新疆府県志輯、第 11 卷、南京：鳳凰出版社、2012 年)

賀長齡編『皇朝經世文編』1826 年

『戸部陝西司丙戌年奏稿』(『清末民国財政予算檔案史料匯編』第 1、2 冊、北京：全国図書館文献縮微複製中心、2006 年)

『戸部陝西司丁亥年奏稿』(『清光緒經營新疆會議摺奏』第 1、2 冊、北京：全国図書館文献縮微複製中心、2010 年(『戸部陝西司會議奏稿』と合冊))

『戸部陝西司奏稿』(馬大正、吳豊培主編『清代新疆稀見奏牘匯編』中冊、烏魯木齊：新疆人民出版社、1996 年)

和寧纂『回疆通志』1804 年(中国地方志集成、新疆府県志輯、第 4 卷、南京：

鳳凰出版社、2012 年)

中国第一歷史檔案館編『嘉慶道光兩朝上諭檔』桂林：廣西師範大學出版社、2000 年

魏光燾撰『戡定新疆記』1898 年（台北：文海出版社、1968 年）

『聯魁新疆奏稿』（馬大正、吳豐培主編『清代新疆稀見奏牘匯編』下卷、烏魯木齊：新疆人民出版社、1996 年）

片岡一忠編『林出賢次郎将来 新疆郷土志三十種』京都：中国文献研究会、1986 年

劉錦棠撰『劉襄錦公奏稿』1898 年（台北：文海出版社、1968 年）

吳汝綸編『李文忠公全集』1905 年（台北：文海出版社、1965 年）

『民国二年度国家予算新疆省歳入歳出分表』（財団法人東洋文庫所蔵 II-15-B-61）

中国第二歷史檔案館編『民国時期新疆檔案匯編 1912-1927』南京：鳳凰出版社、2015 年

中国第二歷史檔案館編『民国時期新疆檔案匯編 1928-1949』南京：鳳凰出版社、2015 年

童鹿主編『民国時期新疆金融檔案史料』南京：鳳凰出版社、2013 年

中国第一歷史檔案館編『乾隆朝上諭檔』北京：檔案出版社、1991 年

曹振鏞等奉勅撰『欽定平定回疆勦擒逆匪方略』1830 年

奕訢奉勅撰『欽定平定陝甘新疆回匪方略』1896 年

徐松輯、松筠修纂『欽定新疆識略』1821 年（中国地方志集成、新疆府県志輯、第 1 卷、南京：鳳凰出版社、2012 年）

劉錦藻撰『清朝統文献通考』1912 年（台北：新興書局、1963 年）

牛貫杰『清代惠遠城文献資料彙編』台北：知書房、2016 年

『清代民国財政預算檔案史料匯編』北京：全国圖書館文献縮微複製中心、2016 年

新疆边疆史地研究中心、新疆維吾爾自治區檔案局編『清代新疆檔案選輯』桂林：廣西師範大學出版社、2012 年

中国第一歷史檔案館編『清代新疆滿文檔案匯編』桂林：廣西師範大學出版社、2010 年

中国第一歷史檔案館、海峽兩岸出版交流中心編『清宮辛亥革命檔案匯編』北京：九州出版社、2011 年

Center for Chinese Research Materials Association of Research Libraries ed., 『清末各地籌防駐軍報銷清冊』 Washington. D. C. : Association of Research Libraries、1976 年

和寧纂『三州輯略』（中国方志叢書、西部地方、第 11 号、台北：成文出版社、1968 年（1805 年の抄本の影印）

魏源『聖武記』1846 年

故宮博物院文献館編『史料旬刊』北平：神武門外發售室、1930–1931 年（台北：国風出版社、1963 年）

陶葆廉輯、陸洪濤校『陶勤肅公奏議遺稿』1924 年（台北：文海出版社、1970 年）

王先謙纂修『同治東華統錄』文瀾書局、1898 年

永保修、達林、竜鐸編『烏魯木齊事宜』1796 年序（中国地方志集成、新疆府県志輯、第 8 卷、南京：鳳凰出版社、2012 年）

中国第一歷史檔案館編『咸豐同治兩朝上諭檔』桂林：広西師範大学出版社、1998 年

汪廷楷輯、祁韻士增纂、松筠纂定『西陲總統事略』1808 年序、（中国地方志集成、新疆府県志輯、第 2 卷、南京：鳳凰出版社、2012 年）

『新疆全省財政説明書』北京：經濟学会、1915 年

袁大化修『新疆全省輿地図』刊行年不明

袁大化修、王樹枏撰『新疆図志』1911 年

馬大正、華立主編、中国社会科学院中国边疆史地研究中心編『新疆郷土志稿』（中国边疆史地資料叢刊 新疆卷）北京：全国図書館文献縮微復制中心、1990 年

李德竜主編『新疆巡撫饒応祺稿本文献集成』北京：学苑出版社、2008 年

李廷玉撰『新伊調査報告意見書』1910 年序

『宣統三年歳入歳出預算表』（財団法人東洋文庫所蔵 II-15-B-66-0）

楊虎城等修、宋伯魯等纂『統修陝西通志稿』（中国西北文献叢書編輯委員会編『西北稀見方誌文献』蘭州：蘭州古籍書店、1990 年、第 6–11 卷）

格琿額纂『伊江彙覽』1775 年序（中国地方志集成、新疆府県志輯、第 9 卷、

南京：鳳凰出版社、2012 年)

『伊江集載』(中国地方志集成、新疆府県志輯、第 9 卷、南京：鳳凰出版社、2012 年)

『伊犁將軍馬広奏稿』(馬大正、吳豊培主編『清代新疆稀見奏牘匯編』下卷、烏魯木齊：新疆人民出版社、1996 年)

『伊犁文檔匯抄』北京：全国図書館文献縮微複製中心、2004 年

中国第二歴史檔案館編『政府公報』上海：上海書店、1988 年

『政治官報』(『清末官報匯編』北京：全国図書館文献縮微複製中心、2006 年)

楊書霖編『左文襄公全集』1890 年(台北：文海出版社、1986 年)

Н. В. Богоявленский, *Западный Застенный Китай. Его прошлое, настоящее состояние и положение в нем русских подданных*, Санкт-Петербург: Типография А. С. Суворина, 1906 (マイクロフィッシュ New York: Norman Ross Publishing, 1994、鮑戈亜夫連斯基著、新疆大学外語系俄語教研室訳『長城外中国西部地区(其今昔状況及俄国臣民的地位)』北京：商務印書館、1980 年)

Н. Н. Пантусов, *Сведения о Кульджинском районе за 1871-1881 годы*, Казань : в Университетской Типографии, 1881

Д. Я. Федоров, *Опыт военно-статистического описания Илийского края*, том 1, 2, Ташкент : Типография Штаба Туркестанского военного округа, 1903

【日本語文献】(著者名五十音順)

安部健夫『清代史の研究』創文社、1971 年

入江啓四郎『支那辺疆と英露の角逐』ナウカ社、1935 年

岩井茂樹「清代の戸部-度支部檔案について」永田英正編『中国出土文字資料の基礎的研究』(平成 4 年度科学研究費補助金総合研究(A)研究成果報告書) 1993 年、77-82 頁。

岩井茂樹『中国近世財政史の研究』京都大学学術出版会、2004 年

岩井茂樹「中華帝国財政の近代化」飯島渉、久保亨、村田雄二郎編『シリーズ 20 世紀中国史 第 1 巻 中華世界と近代』東京大学出版会、2009 年、121-142 頁

岩井茂樹『朝貢・海禁・互市——近世東アジアの貿易と秩序』名古屋大学出版

会、2020 年

上田裕之『清朝支配と貨幣政策——清代前期における制錢供給政策の展開』汲古書院、2009 年

宇山智彦「「個別主義の帝国」ロシアの中央アジア政策——正教化と兵役の問題を中心に」『スラブ研究』第 53 号、2006 年、27-59 頁

榎一雄「新疆の建省 一～五」『榎一雄博士著作集』巻 2、汲古書院、1992 年、113-224 頁（初出は『近代中国』第 15-19 巻、巖南堂、1984-1987 年）

王柯『東トルキスタン共和国研究——中国のイスラムと民族問題』東京大学出版会、1995 年

王柯『20 世紀中国の国家建設と「民族」』東京大学出版会、2006 年

大谷敏夫「十九世紀清朝の新疆統治政策に関する一考察」『桃山歴史地理』第 13 号、1975 年、25-55 頁

岡本隆司『近代中国と海関』名古屋大学出版会、1999 年

岡本隆司「清末民国と塩税」『東洋史研究』第 58 巻第 1 号、1999 年、84-117 頁

岡本隆司『中国の誕生——東アジアの近代外交と国家形成』名古屋大学出版会、2017 年

小沼孝博「換防兵制導入から見た清朝のカシュガリア支配」『社会文化史学』第 41 号、2000 年、19-36 頁

小沼孝博「清朝によるオーロト各オトク支配の展開——モンゴル諸部に対する「旗」支配の導入」『東洋学報』第 85 巻第 4 号、2003 年、602-628 頁

小沼孝博「清朝のジュン＝ガル征服と二重の支配構造」『史学研究』第 240 号、2003 年、58-79 頁

小沼孝博「イリ駐防八旗の設置について——清朝の新疆支配体制の構築に関する一考察」『東方学』第 110 輯、2005 年、108-121 頁

小沼孝博「ベク制度の成立——清朝公文書による東トルキスタン研究序説」『内陸アジア史研究』第 22 号、2007 年、39-59 頁

小沼孝博『清と中央アジア草原——遊牧民の世界から帝国の边疆へ』東京大学出版会、2014 年

加々美光行『中国の民族問題——危機の本質』岩波書店、2008 年

- 香島明雄『中ソ外交史研究 1937-1946』世界思想社、1990 年
- 加島潤『中国計画経済期財政の研究——省・直轄市・自治区統計から』東京大学社会科学研究所現代中国研究拠点、2012 年
- 加島潤『社会主義体制下の上海経済——計画経済と公有化のインパクト』東京大学出版会、2018 年
- 片岡一忠「光緒二十一・二十二年の甘肅の回民反乱について」(上・下)『大阪教育大学紀要』第 II 部門、第 27 巻第 2 号、1978 年、53-77 頁、第 27 巻第 3 号、1979 年、119-138 頁
- 片岡一忠『清朝新疆統治研究』雄山閣、1991 年
- 片岡一忠「朝賀規定から見た清朝と外藩・朝貢国の関係」『駒沢史学』第 52 号、1998 年、240-263 頁
- 加藤繁「清朝後期の財政に就いて」加藤繁『支那経済史考証』下巻、東洋文庫、1953 年、478-492 頁
- 加藤直人「「七人のホージャたち」の聖戦」『史学雑誌』第 86 編第 1 号、1977 年、60-72 頁
- 加藤直人『清代文書資料の研究』汲古書院、2016 年
- 金子民雄『中央アジアに入った日本人』中央公論社、1992 年
- 金子肇『近代中国の中央と地方——民国前期の国家統合と行財政』汲古書院、2008 年
- 華立「乾隆期の新教回民弾圧と新疆への波及」『東アジア研究』第 45 号、2006 年、79-92 頁.
- 華立「清代の天山南路に進出する内地商人——人口移動と辺疆地域との視点から」『地域と社会』第 2 号、1999 年、123-144 頁
- 岸本美緒『清代中国の物価と経済変動』研文出版、1997 年
- 木下恵二「中国国民政府の新疆統治——1942-1947 年」『法学政治学論究』第 38 号、1998 年、261-296 頁
- 木下恵二「楊增新の新疆統治——伝統的統治と国家主権」『法学政治学論究』第 48 号、2001 年、127-156 頁
- 木下恵二「新疆における盛世才の統治と粛清——1937 年-1938 年」『法学政治学論究』第 89 号、2011 年、1-24 頁

窪田順平監修『中央ユーラシア環境史 第2巻 国境の出現』臨川書店、2012年

窪田順平、承志、井上充幸『イリ河流域歴史地理論集——ユーラシア深奥部からの眺め』松香堂、2009年

久保亨『戦間期中国〈自立への模索〉——関税通貨政策と経済発展』東京大学出版会、1999年

黒田明伸『中華帝国の構造と世界経済』名古屋大学出版会、1994年

黒田明伸『貨幣システムの世界史』岩波書店、2003年

香坂昌紀「清代前期のジュンガル政策とその経済効果」『東北学院大学論集 歴史学・地理学』第37号、2004年、1-81頁

小松久男編『中央ユーラシア史』山川出版社、2000年

バルトリド、V. V.、小松久男監訳『トルキスタン文化史』（全2巻）平凡社、2001年

佐伯富「清代における奏銷制度」東洋史研究会編『雍正時代の研究』同朋舎、1986年

佐伯富「清代同治朝における郷勇の撤廃問題」『朝鮮学報』第37・38輯、1966年、316-327頁

坂本是忠『中国辺境と少数民族問題』アジア経済研究所、1970年

坂本是忠『辺疆をめぐる中ソ関係史』アジア経済研究所、1974年

佐口透『十八～十九世紀東トルキスタン社会史研究』吉川弘文館、1963年

佐口透「19世紀中央アジア社会の変容」『岩波講座世界歴史 近代8』岩波書店、1971年、252-279頁

佐口透『新疆民族史研究』吉川弘文館、1986年

佐々木正哉「咸豊二年鄯県の抗糧暴動」『近代中国研究』第5輯、東京大学出版会、1963年

佐藤淳平『近代中国財政史——「外省」から「地方」へ』東京大学出版会、2020年

新免康「「辺境」の民と中国——東トルキスタンから考える」溝口雄三、浜下武志、平石直昭、宮嶋博史編『アジアから考える[3]周縁からの歴史』東京大学出版会、1994年、107-139頁

- 杉山清彦『大清帝国の形成と八旗制』名古屋大学出版会、2015 年
- チェン、ジェローム、北村稔訳『軍紳政権——軍閥支配下の中国』岩波書店、1984 年
- 寺山恭輔『スターリンと新疆 1931–1949』社会評論社、2015 年
- 土井智典「清末度支部金銀庫の収支に対する一考察」『現代中国研究』第 20 号、2007 年、63–84 頁
- 土井智典「清末預備立憲時期における財政制度改革——清理財政局を中心として」『社会経済史学』第 80 巻第 2 号、2014 年、51–71 頁
- 中田吉信「同治年間の陝甘の回乱について」『近代中国研究』第 3 輯、1959 年、69–159 頁
- 中田吉信「新疆都督楊增新」『江上波夫教授古稀記念論集・歴史編』山川出版社、1977 年、551–569 頁
- 中田吉信「「漢奸」から「愛国者」へ——左宗棠の「復権」をめぐる」『就実女子大学史学論集』創刊号、1986 年、49–93 頁
- 西田保『左宗棠と新疆問題』博文館、1942 年
- 野田仁「イリ事件再考——ロシア統治下のイリ地方（1871–1881 年）」窪田順平、承志、井上充幸『イリ河流域歴史地理論集——ユーラシア深奥部からの眺め』松香堂、2009 年、141–188 頁
- 野田仁『露清帝国とカザフ＝ハン国』東京大学出版会、2011 年
- 狭間直樹、岩井茂樹、森時彦、川井悟『データでみる中国近代史』有斐閣、1996 年
- 羽田明『中央アジア史研究』臨川書店、1982 年
- 馬場鍬太郎「天山南北両路の貨幣制度」『支那』第 34 巻 11 月号、1943 年、44–46 頁
- 濱下武志『中国近代経済史研究——清末海関財政と開港場市場圏』東京大学東洋文化研究所報告、汲古書院、1989 年
- 濱田正美「「塩の義務」と「聖戦」の間で」『東洋史研究』第 52 巻第 2 号、1993 年、122–148 頁
- 平瀬巳之吉『近代支那経済史』中央公論社、1942 年
- 平野聡『清帝国とチベット問題——多民族統合の成立と瓦解』名古屋大学出版

会、2004 年

古市大輔「光緒初年盛京行政改革の財政的背景——東三省協餉の不足と盛京湘軍の養廉銀確保の意図」『東洋学報』第 79 巻第 1 号、1997 年、75–103 頁

堀直「清代回疆の貨幣制度——普爾鑄造制について」『中嶋敏先生古稀記念論集』上巻、汲古書院、1980 年、581–602 頁

堀直「新疆の「地方志」」『内陸アジア史研究』第 14 号、1999 年、1–23 頁

松井義夫『清朝経費の研究』満鉄経済調査会、経調資料第 66 編、1935 年

松本和久「新疆生産建設兵団における党・政・軍関係」『早稲田大学政治公法研究』第 93 号、2010 年、43–57 頁

宮下忠雄『中国幣制の特殊研究』日本学術振興会、1952 年

茂木敏夫「中華世界の「近代」的変容——清末の辺疆支配」溝口雄三、浜下武志、平石直昭、宮嶋博史編『アジアから考える[2]地域システム』東京大学出版会、1993 年、269–299 頁

百瀬弘「清朝の異民族統治に於ける財政経済政策」『東亜研究所報』第 20 号、1943 年、1–116 頁

山本進『清代財政史研究』汲古書院、1998 年

山本一「清末山西省の財政改革と「局所」」『社会経済史学』第 79 巻第 4 号、2014 年、37–55 頁

矢野仁一『近代蒙古史研究』弘文堂書房、1925 年

吉田金一「ロシアと清の貿易について」『東洋学報』第 45 巻第 4 号、1963 年、39–86 頁

吉田金一『近代露清関係史』近藤出版社、1974 年

吉澤誠一郎「西北建設政策の始動——南京国民政府における開発の問題」『東洋文化研究所紀要』第 148 冊、2005 年、19–74 頁

吉澤誠一郎「南京国民政府と西北建設」『現代中国研究』第 19 号、2006 年、18–19 頁

ラティモア、中国研究所訳『アジアの焦点』弘文堂、1951 年

臨時台湾旧慣調査会『清国行政法』1910–1914 年（汲古書院、1972 年、復刻）

【中国語文献】（著者名ピンイン順）

- 阿拉騰奧其爾『清代伊犁將軍論稿』北京：民族出版社、1995 年
- 包爾漢『新疆五十年』北京：中國文史史料出版社、1984 年
- 寶音朝克音『清代北部邊疆卡倫研究』北京：中國人民大學出版社、2005 年
- 蔡家芸『清代新疆社會經濟史綱』北京：人民出版社、2006 年
- 陳慧生、陳超『民國新疆史』烏魯木齊：新疆人民出版社、1999 年
- 陳劍平「試析新疆建省以來協餉對社會經濟的影響」『歷史教學』2008 年第 14 期、2009 年、59-63 頁
- 丁煥章主編『甘肅近現代史』蘭州：蘭州大學出版社、1989 年
- 董慶煊、穆淵『新疆近二百年的貨幣與金融』烏魯木齊：新疆大學出版社、1999 年
- 甘肅地方志編纂委員會『甘肅省志第 37 卷財政志』蘭州：甘肅人民出版社、1990 年
- 管守新「劉錦棠恢復和發展新疆經濟的重大措置」『西域研究』1995 年第 4 期、1995 年、62-66 頁
- 《哈薩克族簡史》編寫組『哈薩克族簡史』烏魯木齊：新疆人民出版社、1987 年
- 賀靈、佟克力『錫伯族史』烏魯木齊：新疆人民出版社、1993 年
- 侯德仁「《新疆圖志》史學價值論析」『求是學刊』2004 年第 9 期、114-120 頁
- 華立『清代新疆農業開發史』哈爾濱：黑龍江教育出版社、1998 年
- 賈士毅『民國財政史』上海：商務印書館、1917 年
- 賈士毅『民國統財政史』上海：商務印書館、1932 年
- 紀大椿『新疆近世史論稿』哈爾濱：黑龍江教育出版社、2002 年
- 賴惠敏『乾隆皇帝的荷包』台北：中央研究院近代史研究所、2016 年
- 李磊、田華「清代新疆建省後的田賦制度」『新疆大學學報（社會科學）』第 28 卷第 3 期、2000 年、76-81 頁
- 林映汝「協餉與清廷的新疆治理（1759-1884）」國立台灣師範大學歷史學系碩士論文、2000 年
- 林永匡、王熹『清代西北民族貿易史』北京：中央民族學院出版社、1991 年
- 厲聲『新疆對蘇（俄）貿易史 1600-1990』烏魯木齊：新疆人民出版社、1993 年
- 厲聲「乾隆年間新疆協餉撥解及相關問題」『清史研究』1998 年第 2 期、51-65

頁

劉增合『「財」与「政」——清季財政改制研究』北京：生活·讀書·新知三聯書店、2014年

李信成『楊增新在新疆』台北：國史館、1993年

李興平「試論太平天國起義對甘肅財政的影響」『蘭州教育學院學報』2002年第3期、15-19頁

羅爾綱『湘軍新志』上海：商務印書館、1938年（民國叢書第5編31、1996年）

羅玉東「光緒朝補救財政之方策」『中國近代經濟史研究集刊』第1・2號、1933年、189-270頁

羅玉東『中國釐金史』上海：商務印書館、1936年

馬大正『中國邊疆研究論稿』哈爾濱：黑龍江教育出版社、2002年

馬陵合「試析左宗棠西征借款與協餉的關係」『歷史檔案』1997年第1期、105-111頁

馬陵合「清末民初的國民捐概述」『檔案與史學』1998年第4期、29-32頁

米鎮波『清代西北邊境地區中俄貿易——從道光朝至宣統朝』天津：天津社會科學院出版社、2005年

穆淵『清代新疆貨幣史』烏魯木齊：新疆大學出版社、1994年

彭雨新「清末中央與各省財政關係」『社會科學雜誌』第9卷第1期、1947年、83-110頁

彭沢益『十九世紀後半期的中國財政與經濟』北京：人民出版社、1983年

彭沢益「清代財政管理体制與收支結構」『中國社會科學院研究生院學報』1990年第2期、48-59頁

秦翰才『左文襄公在西北』長沙：岳麓書社、1984年（初版、上海：商務印書館、1946年）

秦暉、韓敏『陝西通史 明清卷』西安：陝西師範大學出版社、1997年

齊清順「清代新疆的協餉與專餉」『新疆歷史研究』1985年第1期、60-71頁

齊清順「清代新疆餉銀的來源、使用和欠額」『新疆歷史研究』1985年第3期、77-84頁

齊清順「清代新疆的協餉供應和財政危機」『新疆社會科學』1987年第3期、1987年、74-85頁

- 齊清順『清代新疆經濟史稿』烏魯木齊：新疆人民出版社、2014 年
- 史志宏『清代戶部銀庫收支和庫存統計』福州：福建人民出版社、2008 年
- 土井智典「從田賦地丁看晚清奏銷制度」『北大史學』第 11 輯 2005 年、274–299 頁
- 王宏志『左宗棠平西北回亂糧餉之籌畫與轉運研究』台北：正中書局、1972 年
- 王鳴野「建省後新疆歷史研究述評」『中國邊疆史地研究』2004 年第 12 期、135–140 頁
- 王樹槐『庚子賠款』台北：中央研究院近代史研究所、1974 年
- 吳昌穩「以公家之財濟公家之用——清代協餉制度的創建」『學術研究』2013 年第 1 期、113–121 頁
- 吳昌穩「清末新政時期協餉制度的危局與末路」『廣東社會科學』2013 年第 2 期、140–146 頁
- 吳昌穩「從受協到承協——咸豐年間四川財政地位的轉換」『歷史教學』2008 年第 16 期、16–19 頁
- 吳昌穩『晚清協餉制度研究』北京：社會科學文獻出版社、2018 年
- 吳元豐「清乾隆年間新疆普爾錢的鑄造流通及作用」『西域研究』1997 年第 1 期、39–49 頁
- 謝麗『清代至民國時期農業開發對塔里木盆地南緣生態環境的影響』上海：上海人民出版社、2008 年
- 新疆社會科學院民族研究所編著『新疆簡史』第 1 冊、第 2 冊、烏魯木齊：新疆人民出版社、1980 年、1985 年
- 新疆維吾爾自治區地方志編纂委員會、『新疆通志·財政志』編纂委員會『新疆通志 第 57 卷 財政志』烏魯木齊：新疆人民出版社、1999 年
- 楊蔭溥『民國財政史』北京：中國財政經濟出版社、1985 年
- 曾問吾『中國經營西域史』上海：商務印書館、1936 年（民國叢書第一編 81 歷史地理類、上海：上海書店、1989 年）
- 趙雲田『清末新政研究——20 世紀初的中國邊疆』哈爾濱：黑龍江教育出版社、2004 年
- 張大軍『新疆風暴七十年』台北：蘭溪出版社、1980 年
- 張維『蘭州古今注』1943 年

張永江『清代藩部研究——以政治變動為中心』哈爾濱：黑龍江教育出版社，2001年

鍾興麟「新疆建省与社会經濟的發展」『西域研究』1994年第4期、49–53頁

周育民『晚清財政与社会變遷』上海：上海人民出版社、2000年

【英語文獻】

Benson, Linda, *The Ili Rebellion: The Moslem Challenge to Chinese Authority in Xinjiang, 1944–1949*, Armonk: M. E. Sharpe, 1990.

Bormanshinov, Arash, “Prince Palta”, 国立政治大学國際中国边疆學術會議論文集編輯委员会編『国立政治大学國際中国边疆學術會議論文集』台北：国立政治大学，1985.

Chu, Wen-Djang, *The Moslem Rebellion in Northwest China 1862–1878*, The Hague: Mouton & Co., 1966.

Dabbs, Jack A, *History of the Discovery and Exploration of Chinese Turkestan*, The Hague: Mouton & Co., 1963.

Fletcher, Joseph, “Ch’ing Inner Asia c.1800”, in *The Cambridge History of China*. Volume 10, Part I, *Late Ch’ing, 1800–1911*, edited by John K. Fairbank, pp. 35–106. Cambridge: Cambridge University Press, 1978.

Forbes, Andrew, *Warlords and Muslims in Chinese Central Asia: A Political History of Republican Sinkiang 1911–1949*, Cambridge: Cambridge University Press, 1986.

Hsü, Immanuel C. Y., *The Ili Crisis*, Oxford: Clarendon Press, 1965.

Kim Hodong, *Holy War in China: The Muslim Rebellion and State in Chinese Central Asia, 1864–1877*, Stanford: Stanford University Press, 2004.

Mancall, M., *China at the Center: 300 Years of Foreign Policy*, New York: The Free Press, 1984.

Millward, James A., “Qing Silk-Horse Trade with the Qazaqs in Yili and Tarbaghatai, 1758–1853”, *Central & Inner Asian Studies*, Vol.7, 1992, pp. 1–42.

Millward, James A., *Beyond the Pass : Economy, Ethnicity, and Empire in Qing Central Asia, 1759–1864*, Stanford : Stanford University Press, 1998.

Millward, James A., *Eurasian Cross Road: A History of Xinjiang*, New York: Columbia

University Press, 2007.

Morse, M. B., *The Trade and Administration of China*, 3rd ed., New York: Longmans, 1920.

Moseley, George, *A Sino-Soviet Cultural Frontier: The Ili Kazakh Autonomous Chou*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1996.

Onuma Takahiro, David Brophy and Shinmen Yasushi, *Xinjiang in the Context of Central Eurasian Transformations*, Tokyo: Toyo Bunko, 2018.

Paine, S. C. M., *Imperial Rivals: China, Russia, and their disputed frontier*, Armonk: M. E. Sharpe, 1996.

Perdue, Peter C., *China Marches West: The Qing Conquest of Central Eurasia*, Cambridge, Mass.: Belknap Press of Harvard University Press, 2005.

Pomeranz, Kenneth, *The Making of a Hinterland: State, Society, and Economy in Inland North China, 1853–1937*, Berkeley: University of California Press, 1993.

Skrine, Clarmont and Pamela Nightingale, *Macartney at Kashgar: New Light on British, Chinese and Russian Activities in Sinkiang, 1890–1918*, London: Methuen, 1973.

Wang Yeh-chien, *Land Taxation in Imperial China: 1750–1911*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1973.

Wiens, Harold J., “The Historical and Geographical Role of Urumchi, Capital of Chinese Central Asia”, *Annals of the Association of American Geographers*, Vol. 53, 1963, pp. 441–463.

Wiens, Harold J., “Change in the Ethnography and Land Use of the Ili Valley and Region, Chinese Turkestan”, *Annals of the Association of American Geographers*, Vol. 59, 1969, pp. 753–775.

論文の内容の要旨

18 世紀半ばにジュンガルを滅ぼし、カシュガル・ホージャ家の反乱を鎮圧した清朝は、中央アジアの東部、天山山脈の南北に広がる地域を勢力圏に収め、新疆と名付けた。その後 19 世紀末の国境画定により西北部がロシア領になった以外は、清朝時代の新疆の領域がほぼそのまま現在の新疆ウイグル自治区となっている。この約 250 年の間、中国の政権、すなわち清朝、中華民国、中華人民共和国はどのようにしてこの地域への影響力を保ち続けていたのか。特に政治的な混乱が続く一方で、経済開発や漢族の進出など、現代まで続く変化が生じた 19 世紀後半から 20 世紀半ばまでの時期は、新疆の歴史の中で重要な意味を持つ。本論文は、この時期を近代と呼び、この期間における中国による新疆統治を財政の観点から考察するものである。

序章では、新疆財政の基本的な姿と先行研究の状況を示した上で、財政支援という課題とその意義を提示した。辺境防衛のために新疆には 18 世紀末から常に大規模な軍隊が配置されていた。この軍隊を維持するために多くの軍事費が必要であったが、現地での税収は限られていた。この財政赤字を補うためには、中央政府や財政的に余裕のある省が資金を送ることが必要であった。新疆統治の安定性や新疆と内地の関係を考察するためには、この財政支援の分析が不可欠である。しかしながら個別の産業分野の発展や税制、貨幣に関する先行研究は存在するが、財政構造の全体像や財政支援の実態の解明は不十分である。そのため本稿では財政支援について、制度、金額、地理的要素の三つの側面から計画や実態の解明を試みるとともに、財政支援制度と他の財政制度との関係、財政支援の実現具合と新疆統治の安定性との関係、資金を負担する機関の変化などから見る新疆と他地域との関係について考察することを目的とする。

本論文は時系列を追う構成を採っており、第 1 章が 18 世紀半ばから 19 世紀半ばの動乱の発生まで、第 2 章から第 4 章が清末、第 5 章、第 6 章が中華民国時期を対象としている。

第 1 章では、新疆統治をはじめた清朝が、当初作り上げた財政支援制度とその実態について分析した。清代には財政的に余裕のある省が、中央政府の指示を受けて、別の省へ資金を送る協餉と呼ばれる制度があった。新疆と甘粛省へ協餉を

送る際には、経費の見積もりや送金の指示を早めたり、甘肅省が立て替え払いをしたりする特別な措置がとられていた。また現銀を現地に備蓄する制度もあり、協餉を送るための距離や時間を克服するための努力がなされていた。さらにカシュガル・ホージャ家の勢力が新疆南部に侵入を繰り返した 1820 年代から 1840 年代には、新疆へ臨時の軍費が送られるとともに、協餉の規定や備蓄制度が整備された。しかしながら、新疆の社会や経済は依然として大規模な軍隊の需要を満たすほど成熟しておらず、物資を直接輸送することも行われていた。また制度面の不備も残っていた。特に甘肅省との間で新疆東部の財政的位置づけが曖昧であり、協餉が地域別に把握されているなど、この時点では新疆全体を財政的にまとめる構造がなかったことを指摘した。

第 2 章では、1860 年代から 1870 年代にかけて中国の西北部に広がった動乱の鎮圧過程における軍費の供給について考察した。動乱以前から引き続き、新疆へは主に山西、河南、四川といった内陸の省が財政支援を行うことになっていた。しかし当初清朝は陝西と甘肅での軍事活動を優先したため、新疆へ送られる軍費は少なく、軍事活動は進まなかった。1865 年以降に沿海部の省からの資金が西北部へ送られるようになり、大規模な軍事活動が可能になり、動乱は平定された。

従来の研究ではこの動乱鎮圧における左宗棠の役割が強調されてきた。本論文でも、彼の作った規定の持続性や資金調達成功という点で、左宗棠の役割の大きさを確認した。一方で、送金の実現には中央の承認が必要であったことや、中央政府や彼の前任者による計画の存在も指摘した。また、左宗棠は管理する部隊や軍費の範囲を徐々に広げていったものの、最後まで彼の管理が及びにくかった部隊も残っていた。

第 3 章は 1884 年の建省について論じた。建省とは清朝による新疆省の設置とそれに伴う様々な改革を指す。この前後の時期における、新疆への協餉の実態と関連する議論を、軍縮との関係に着目して分析した。建省を主導した左宗棠や劉錦棠は、多くの資金を求めていたと考えられるが、実際には軍事活動終了直後の 1878 年に届くことになっていた金額を、以後も継続して送金するよう求めることしかできなかった。しかしその後は軍縮が進展する一方で、予定されていた送金額の削減は行われなかった。清仏戦争の期間を除けば、送金状況も良好であり、

中央政府や内地の省は、新疆への協餉の確保に努めていたといえる。

送金経路を見た場合、動乱鎮圧後も各部隊への送金命令が乱立していた。建省に伴って、協餉の流れを一つにまとめる改革が行われた。従来はこの改革については、建省後も八旗の武官である伊犁將軍に一定の権限が残されたことから、財政権限の一元化が不十分であったと説明されてきた。しかし軍縮により撤退した部隊への資金の流れは整理されたこと、送られた資金を新疆巡撫が分配する体制が確立したことから、改革は成果を収めたと言えるだろう。

第4章は、辛亥革命までの清末省制時期を対象として、財政支援の受領と移転の構造や、紙幣発行を含めた財政状況の変遷を解明した。この時期の新疆では、新疆巡撫、伊犁將軍、塔爾巴哈台參贊大臣の三者が財政上の関係を持ちながら活動していた。巡撫の下に位置する布政司庫には封存銀と呼ばれる銀の備蓄が毎年行われており、臨時の支出に対応していた。巡撫から伊犁將軍への支援も行われており、省制とそれに伴う布政司庫の存在が新疆財政に柔軟性や安定性を与えていた。

財政支援の実現具合に着目すると、建省から1899年までは協餉はほぼ規定通りに到着していた。義和団事件の際は一時的に協餉が届かなくなり、さらに1904年以降は送金規定額そのものが減らされたものの、山西や四川という内陸部からの支援は依然として届いていた。通説では義和団事件以降には協餉が届かなくなったとされてきたが、この時点でも送金状況はある程度安定していたことが明らかになった。1907年以降は協餉の到着額が急速に減少し、事実上の不換紙幣の発行が兵士の不満や社会の混乱を招くことになった。

第5章は省長楊增新が新疆を統治した1912年から1928年までの期間を扱う。まず彼の統治時期の財政収支の全体像と貨幣政策の解明を試みた。民国最初期は政治情勢だけでなく、財政的にも混乱期であったといえる。財政支出は多く、紙幣発行で収入を補っていた。1916年から1919年頃までは短い安定期であり、体制の確立とともに歳出が減る一方、歳入の増加が見込まれた時期であり、この時期には紙幣の回収が進められた。その後1920年、1925年と段階的に歳出が増えていく時代に入り、それに伴って新たに発行される紙幣の量も増えていった。ただし1920年代には、新たに発行された紙幣はある程度の信用を得て流通していたと考えられる。

従来は、辛亥革命以後は新疆への財政支援は行われなくなったとされてきた。しかし 1919 年頃までは中央からの財政支援がある程度確認できる。史料不足により 1920 年代後半の状況は不明であるが、辛亥革命以降も中央政府や内地の各省は、新疆に対して直接あるいは間接的な支援を行っていたことを明らかにした。

第 6 章は、1928 年から 1949 年までの新疆の財政収支と貨幣政策について検討した。1930 年代初めまでの動乱期の財政難から 1934 年以降の盛世才統治時期による財政状況の回復、1940 年代半ば以降の財政状況の急速な悪化、という展開は先行研究の認識と同じである。ただし本論文では、盛世才の統治時期やその後も内地からの支援があったこと、特に 1939 年から 1942 年頃までのソ連から国民政府への軍事援助に関わる送金が、内地から新疆への資金の移動に重要な意味を持った可能性があることを指摘した。

1939 年新疆の幣制改革により新疆と内地の幣制は強いつながりを持つことになった。しかし同時に、内地から流入した大量の法幣や金元券は新疆に滞留し、価値の下落から新疆財政や現地社会を混乱させた。

終章「財政支援からみた新疆の近代」では、本論文全体を通観して、新疆に対して行われた財政支援の特徴を分析し、さらに財政支援が新疆統治の中で担った意義について考察した。

新疆への財政支援制度は成立当初から、送金にかかる時間を短縮し、臨時の支出にも対応できるように工夫されており、近代にはさらに制度が整備された。この制度によって多くの資金が新疆へ送られ、新疆統治の安定に貢献した。このことは、辛亥革命以後に内地の省が自律性を高める中でも、新疆省が中央政府とのつながりを保っていた理由の一つだと考えられる。財政支援により、辺境を防衛し、中国の一体性を保つという構造は、18 世紀半ば以降常に存在していたのである。

一方で近代における変化も指摘できる。建省以前の新疆への財政支援は、地域別、部隊別に送金する形を採っており、新疆と甘粛の財政的な境目も不明瞭であった。布政司庫を中心として資金を受領し、省内に分配する体制を作り上げた建省は、新疆に財政的な枠組みを与える改革であった。この財政的な一体性は、新疆という地域が一つのまとまりとして存続することに寄与したと考えられる。